

有田・小田部 43

—有田遺跡群第216次調査報告—

2007

福岡市教育委員会

有田・小田部 43

—有田遺跡群第 216 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 919 集



2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。そのため福岡市域には多くの遺跡が残されています。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、集合住宅建築に伴い調査を実施した有田遺跡群第216次調査の内容について報告するものです。今回の調査では古代の官道に関係する可能性のある溝を検出するとともに、弥生時代から古墳時代後期にかけての竪穴住居・掘立柱建物が出土しました。これらは古代における早良平野の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成にまで多くのご協力を賜りました毛利一實様をはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が集合住宅建築に伴い、福岡市早良区小田部2-91他において実施した発掘調査である有田遺跡群第216次調査の報告書である。なお、調査および整理費用については一部国庫補助金を充当した。
2. 本書で報告する調査の細目は以下の通りである

遺跡調査番号	0484		遺跡略号	ART-216	
地番	福岡市早良区小田部2-91-92-1-92-2地内		分布地図記号	No.082 原	
開発面積	1,915.43m ²	調査対象面積	1,800m ²	調査面積	1,405.3m ²
調査期間	平成17年2月1日～4月26日				

3. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
4. 本書に掲載した遺物実測図は阿部が作成した。
5. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
6. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
7. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より 6° 40' 西偏する。
8. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、堅穴住居をSC、溝をSD、土壙をSK、ピットをSPと略称する。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の記録	3
1. 調査概要	3
2. 造構・遺物	3
①掘立柱建物 (SB)	3
②竪穴住居 (SC)	4
③溝 (SD)	8
④ピット・その他	11
第4章まとめ	12

挿 図 目 次

Fig. 1	有田遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)	2
Fig. 2	調査区位置図 (1/1,000)	3
Fig. 3	掘立柱建物・竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	4
Fig. 4	調査区全体図 (1/200)	折り込み
Fig. 5	SB02-06-07実測図 (1/60)	5
Fig. 6	SB08-09実測図 (1/60)	6
Fig. 7	SC21-167実測図 (1/60)	7
Fig. 8	SD01実測図 (1/300)	8
Fig. 9	SD01上層出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig.10	SD01下層出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig.11	SD01土層断面実測図 (1/40)	10
Fig.12	ピット出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig.13	SP500遺物出土状況実測図 (1/20)	11
Fig.14	216次調査出土石製品実測図 (1/3-1/2)	11

図 版 目 次

PL. 1	1. 調査区全景 (直上より、上が南) 2. 掘立柱建物SB02 (直上より、上が北) 3. 掘立柱建物SB07 (南より)
PL. 2	1. 掘立柱建物SB08 (直上より、上が南) 2. 竪穴住居SC21 (直上より、上が南) 3. 竪穴住居SC167 (東より)
PL. 3	1. SC167竪検出状況 (西より) 2. SC167竪土層断面 (南より) 3. SD01の東部 (西より)
PL. 4	1. SD01の西部 (東より) 2. SD01東端土層断面 (西より) 3. SD01東西方向土層断面 (北より)
PL. 5	1. SD01土層断面 (B-B'部分・西より) 2. SD01西端部土層 (東より) 3. ゆるい落ちの土層 (西より)
PL. 6	1. SP500遺物出土状 (東より) 2. SP185焼土塊出土状況 (北より) 3. SP123遺物出土状況 (北より)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

2004(平成16)年10月13日付で毛利一實氏より本市教育委員会埋蔵文化財課(現・埋蔵文化財第1課)宛に早良区小田部2-91・92-1・92-2地内における集合住宅建築に伴う埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けて埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれていることを確認し、当該地で平成16年12月2日に試掘調査を実施した。この試掘調査において土壌・柱穴などの遺構が検出された。この成果を元に両者で協議を行ったところ、建築工事によって遺構の破壊を免れないため、建物部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、2005年2月1日から発掘調査、2006年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

2. 調査組織

調査委託：毛利一實

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課(現・埋蔵文化財第2課)課長 山口讓治(前任) 力武卓治(現任)
同課調査第1係長 田中壽夫(前任) 池崎謙二(現任)

調査庶務：文化財整備課(現・文化財管理課) 後藤泰子

事前審査：埋蔵文化財課(現・埋蔵文化財第1課)事前審査係長 濱石哲也

同係主任文化財主事 吉留秀敏

同係文化財主事 本田浩二郎(前任) 松浦一之介(前任) 上角智希(現任)

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 阿部泰之

調査作業：田原忠昭 真田弘二 神原堅 野崎賛治 宮原邦江 山田ヤス子 加島定次郎

高橋茂子 中村宏 緒方信子 大塩皓 廣瀬公則 廣瀬博子 樋口ミコ子 井上正通
保利順二 野田順二 土橋一則 吉田哲夫

整理作業：窪田慧 黒早苗

調査指導員：日野尚志

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで毛利一實様をはじめとして地権者・施工関係者の皆様には多大なご協力とご理解を賜りました。また調査指導員として来跡くださった日野尚志先生・井沢洋一氏(文化財管理課主査)には古代官道・官衙・小田部城および既往の調査に関する多くのご助言・ご教示を賜りました。ここに記して深く感謝の意を表します。

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

現在の行政区では福岡市早良区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる沖積平野である。有田遺跡群はその中央部に位置する独立丘陵に形成される。

2. 歴史的環境

有田遺跡群は旧石器時代から近世に至る遺構・遺物が出土する複合遺跡である。

旧石器時代遺物は第4次・第6次調査など台地の最高所周辺で出土し、3次地点で文化層を検出できた。縄文時代の遺構で顕著なものは中期から後期前半の貯蔵穴群で第5次・115次調査地点を中心に検出され、台地北東部では中期から弥生早期にかけての遺物を含む自然流路が検出されている。

弥生時代には台地の各尾根上に遺構・遺物が分布する。台地の最高所を取り囲むように前期のV字溝が検出され、長径300m・短径200mを測る環濠とされる。台地南端部では高等学校敷地内で金海式壺棺から銅かが出土している。中期まで遺構は各所で検出されるが、後期には遺構数は概ね減少をたどる。

古墳時代には台地の各尾根上に遺構・遺物が分布する。3本の柱で1単位をなす柱列で区画された籠柱の掘立柱建物群が複数の地点で検出されており、「ミヤケ」関連の遺構の可能性を指摘されている。台地の北部では墳墓が多く築造され、他の遺構が希薄なことから墓域となったことが推測される。

古代には第85次調査地点で官衙建物群が検出され、早良郡衙正殿と推定されている。その北部には平行して東西に走る2条の溝が検出され、古代西海道の側溝との見方もある。

中世には台地の南半に掘立柱建物群が検出される。台地の最高所周辺に大規模な溝状遺構が見られ、大友氏被官小田部氏の里城「小田辺城」と推定されている。



Fig.1 有田遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

第3章 調査の記録

1. 調査概要

今回報告する第216次調査地点は有田遺跡群の中央部、東西に解析する谷により鞍部状となる所に位置する。遺構は現地表面直下、黄褐色ローム質土上にて検出した。削平の結果遺構の密度は薄い。とりわけ西に向かうほど遺構の遺存状況は悪く、深い遺構以外は消滅していると推測される。

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物5棟・竪穴住居2軒・溝1条・柱穴・ピットである。掘立柱建物は1×1間の建物が竪穴住居の主柱穴の可能性を有するが、1×2間の建物は弥生時代中期後半～末頃、2×2間の建物は古墳時代後期と推測される。竪穴住居は、調査区北西隅の方形住居は古墳時代後期、同東側の円形住居は弥生時代前期末頃と推測される。今回の調査で注目される遺構は、調査区南端に伸びる溝である。遺構面のロームが削平されているため2箇所途切れる部分が見られるが、一連の溝と推測される。詳細は第2・第3節に記すが、旧道を挟んで南に位置する第3a次調査区・西に位置する第164次調査検出の溝と併せ古代官道の側溝とされる溝の一部と推測される。

2. 遺構と遺物

①掘立柱建物 (SB)

5棟検出した。このほかにも柱痕跡を有する柱穴を複数検出しているが、現場で対になる柱穴を拾えたものを掘立柱建物と認定した。

SB02 (Fig.4) 調査区東部にて検出した、2×2間の側柱建物である。2基の柱穴が既設建物の搅乱に切られるが、すべての柱穴で柱痕跡を確認できた。柱穴は略方形で柱間は1.5~1.65mを測る。遺物は弥生土器・土師器が出土したが、小片かつ少量で器形のわかる個体はない。



Fig.2 調査区位置図 (1/1,000)

SB06 (Fig. 4) 調査区中央部にて検出した。長軸を東西方向に向ける1×2間の建物である。柱穴は不整円形で、削平の結果20~40cmと浅い。柱間は柱穴の中心同士で2~2.2mを測る。

出土遺物 (Fig. 3) 1は須恵器蓋の小片である。混入の可能性が高い。

SB07 (Fig. 4) 調査区東部で検出した、1間×1間の建物である。柱穴の配列から竪穴住居の主柱穴の可能性も考えられるが、現場では積極的な根拠を見いだせなかたため暫定的に掘立柱建物として報告する。柱穴は円形で径30cm前後と他の建物に比べ小さい。南側の柱穴で柱痕跡を確認した。柱間は柱穴の中心同士で2.2~2.6mを測る。遺物は弥生土器の小片が少量出土した。

SB08 (Fig. 6) 調査区中央部にて検出した。長軸を南北方向に有する1×2間の建物である。柱穴は不整円形で、削平の結果深さは20~30cm前後と浅い。北東隅の柱穴1基で柱痕跡を検出した。柱間は柱穴の中心同士で2.1~2.5mを測る。遺物は弥生土器の小片が少量出土した。

SB09 (Fig. 6) 調査区南東部で検出した、長軸を東西方向に持つ1×2間の建物である。溝SD01に切られ、南西隅の柱穴を失っている。柱穴は不整円形で、西側梁筋の1基（深さ25cm）をのぞき深さ60cm前後を測る。南桁筋で柱痕跡を検出した。柱間は梁行で2.7m前後、桁行で2.8mを測る。出土遺物 (Fig. 3) いずれも弥生土器である。4は壺である。口縁部の小片で、口径25.2cmに復元される。7は壺の底部である。小片で底径7.6cmに復元される。

②竪穴住居 (SC)

2軒検出した。円形住居と方形住居が各1軒である。時期は調査概要に記す通り推測される。その他ピットの配列が略円形となる地点がSB08の南に1箇所見られたが、浅く不整で埋土もSC21とは異なるため、住居址とは認定しなかった。

SC21 (Fig. 7) 調査区南西部で検出した。周壁は削平のため失われるが、ピット群が環状に配置される状況から円形住居跡として報告する。柱穴は切り合ひ関係があり、少なくとも1回の建て替えが行われたと推測される。北西部を擾乱に切られるが、側柱から周壁までの間壁を1m以内とすれば径6.0~6.5mを測る住居となろうか。柱穴は不整円形を呈し径40~60cm、深さ40~60cmを測る。柱痕跡は検出できなかった。中央に円形のピットを1基検出した。当初炉跡と推測し掘り下げを行ったが焼土等炉跡の要素は検出されなかった。中央で屋根を支える柱のための柱穴か。

出土遺物 (Fig. 3) いずれも弥生土器である。5は壺である。肩部から頸部にかけての小片で外面に2条の突帯と羽状文が観察される。6は壺の底部である。小片で底径6.8cmに復元される。

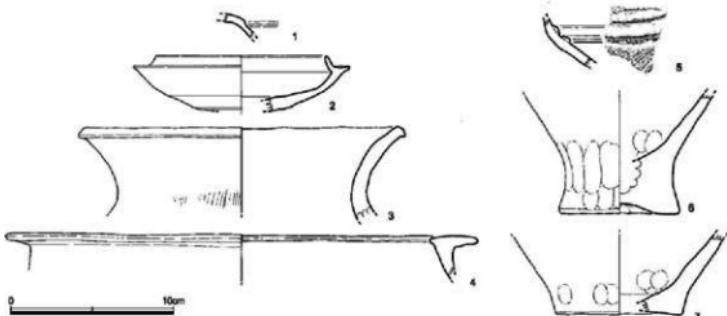


Fig. 3 挖立柱建物・竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



Fig. 4 調査区全体図 (1/200)

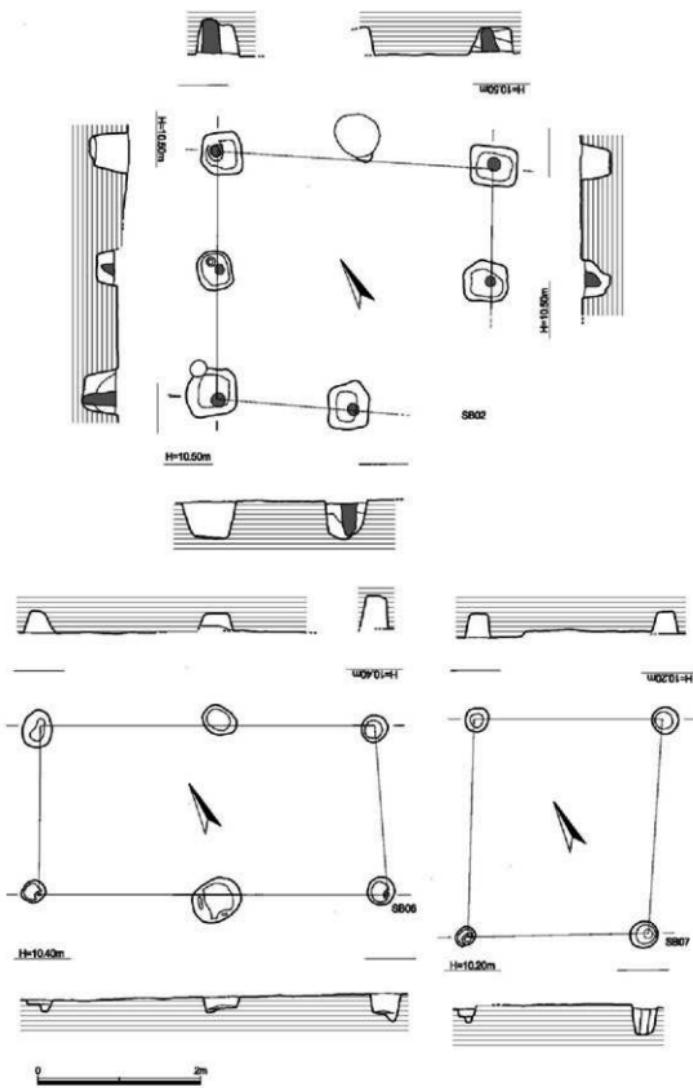


Fig. 5 SB02・06・07実測図 (1/60)

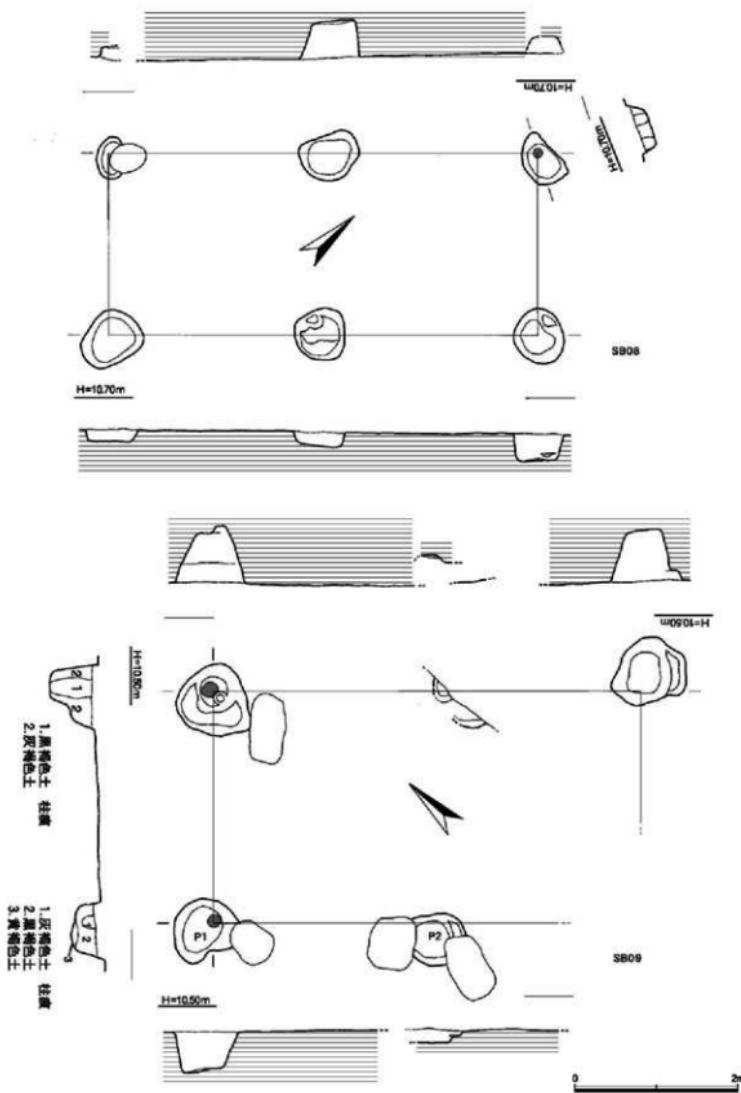


Fig. 6 SB08-09 実測図 (1/60)

SC167 (Fig. 7) 調査区北隅部で検出した。全体の1/4程度を検出し、南東隅角から東西・南北とも2.1m以上の方形住居址である。周壁は掘方底面まで20~25cm程度と浅い。主柱穴は1基検出した。柱痕跡もあるが浅い。主柱を立てた後床面を構築したものと推測される。柱穴は円形で径20cmを測る。それに隣接して床面直上から砾石が1点出土した。壁溝は検出されなかった。貼り床は検出部についていえば底面全体に施される。ロームのブロックが多く混じった暗褐色土を用い、厚さ20cm前後を測る。掘り方の底面はほぼフラットである。東壁中央付近で竈を検出した。壁面から突出してつくられる。遺存状況は悪く、焼土をブロック状に含む灰白色粘土が不整規円形状に分布する状況で竈の原形はとどめてない。土層断面の観察から貼り床を切り床を掘り込んだ構築されていたと推測される。

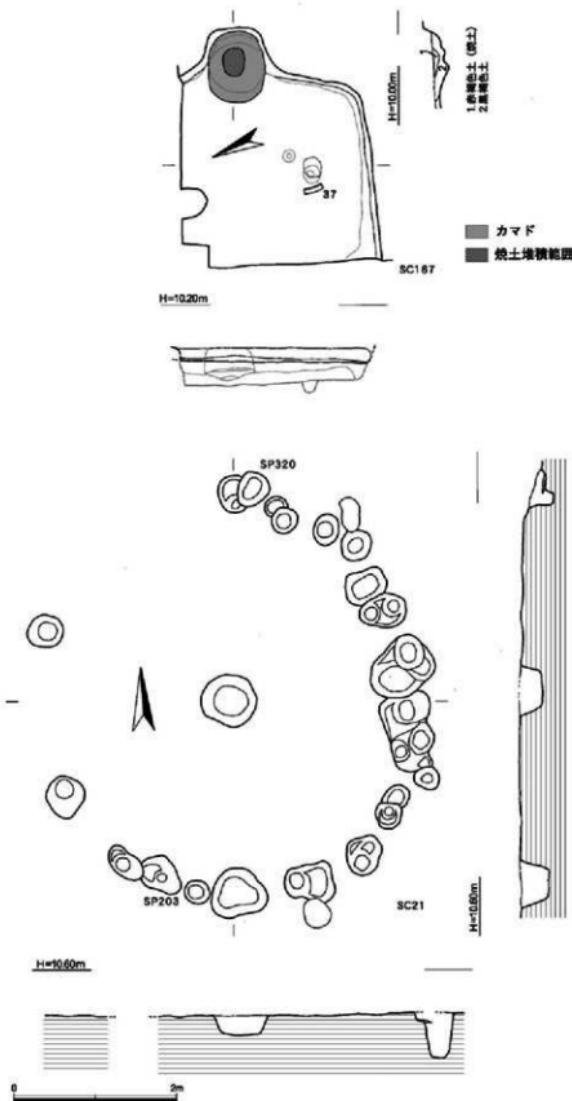


Fig 7 SC21・167実測図 (1/60)

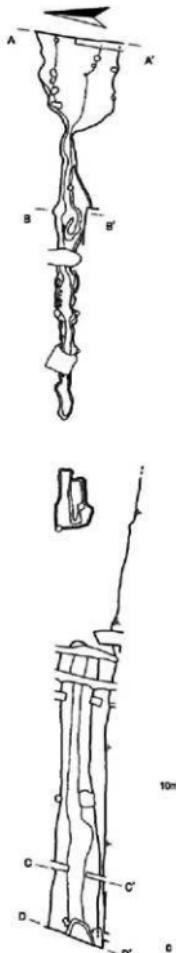


Fig. 8 SD01実測図 (1/300)

出土遺物 (Fig. 3) 2は須恵器坏身である。小片で口径10.2cmに復元される。3は土師器壺である。口縁部の小片である。(Fig.14) 37-40は砥石である。いずれも砂岩質の石材を用いる。37は砂粒が粗く2面研面を有する。38はきめの細かい石材を用い、摺理に沿って削られている。研面は2面あり、研磨対象物によるとみられる微少な段差が観察される。

③溝 (SD)

1条検出した。3箇所に分かれているが、1条の溝が削平された状況と推測される。旧道を挟んで南に位置する第3a次調査区・西に位置する第164次調査検出の溝と併せ古代官道の側溝とされる溝の一部と推測される。なおSD01の南に緩い落ちを検出したが、埋土・遺物の状況から遺構ではないと判断した。

SD01 (Fig. 8) 調査区南壁近くで検出した。磁北には直交する方向で概ね直線的に調査区を貫く溝である。幅は東端部が最も広く5.0mを測り、東端から西へ5.6mの地点が最も狭く40cm程度である。平均すれば1.5~1.6mとなろうが、削平されているため旧状は不明である。深さは東端で85cm、西端で82cmを測り、東端から西へ17m前後まで底面に径30~50cmの小ピットが検出される。最深部でも湧水は見られない。調査区中央に向かうほど徐々に浅くなり、東端から23.5m、西端から19.3mの地点で途切れ、その中間に浅く溝の底面のみ残存する部分が検出できた。

土層断面図をFig.11に示す。東壁部分の土層断面では、溝は鳥栖ロームを掘り抜いて八女粘土層を30cm掘り込む。断面形は緩い逆台形で、他の地点でも概ね類似した形態である。少なくとも1回の掘り直しが推測され、掘り直し後の堆積土から遺物が多く出土した。掘り直し前と後で極力分層して掘り下げたが、遺物の組成に顕著な差は見られなかった。ただし掘り直し後の堆積土には貿易陶磁が少量含まれ、最終的な埋没の時期は中世まで下ると思われる。土層断面の観察から掘り直し前の埋土は人為的な堆積、掘り直し後の埋土は自然堆積と推測される。出土遺物 (Fig. 9)

8~10は陶磁器である。8は白磁碗の口縁部である。小片で口唇部が鈍角に外反する。9は龍泉窯系青磁の体部である。碗か。10は同安窯系青磁皿である。底部の小片。11は土師器碗である。底径7.8cmを測る。12~17は須恵器である。12は蓋の小片で口径11.2cmに復元される。13は高坏の小片で、外面にカキメを有する。14は坏身である。口径10.2cmに復元される小片である。15~17は高台付き坏である。いずれも底部の小片で15は底径9.2cm、16は8.0cmに復元される。17は40%残存する個体で口径14.8cm・底径9.2cmに復元される。18は土師器皿の小片。口径15.2cmに復元される。19は須恵器壺である。底部を欠く小片で、口径17.5cmに復元できた。外面に平行タタキ、内面に当て具痕を有する。軟質でやや焼成不良か。20~22は土錐である。20は略円形で径3.0cmを測る。21・22は葉巻形を呈する。21は過半を欠損し残存長4.3cm、22は60%残存し器長7.6cm、径2.1cmを測る。いずれも円筒形の芯に粘土を巻き付け、指押さえにて整形し

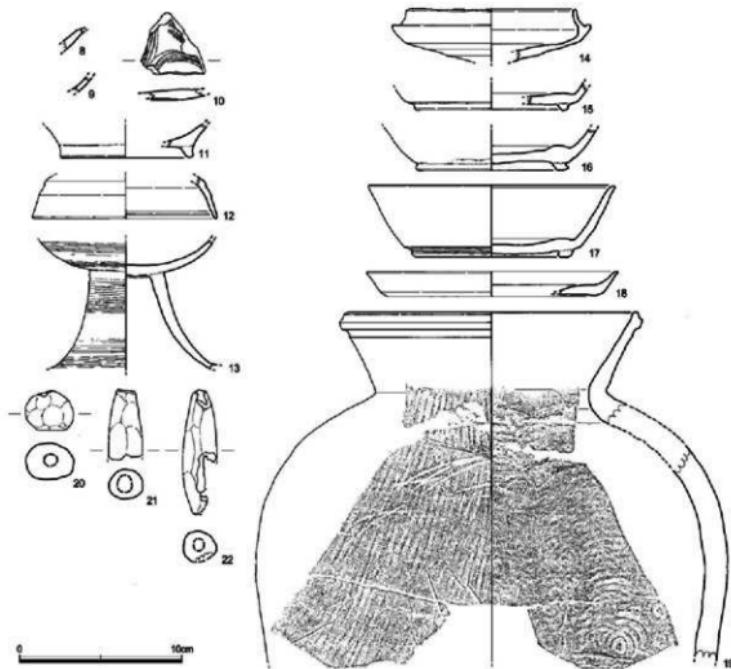


Fig. 9 SD01上層出土遺物実測図 (1/3)

ている。

(Fig.10) 掘り直し前の層から出土した遺物である。

23・24は土師器である。23は碗である。底部の小片。24は皿の小片で、口径10.6cmに復元される。

磨滅し不明瞭だが

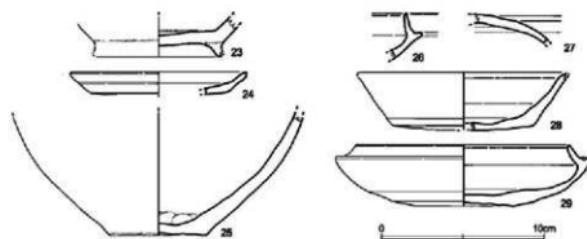


Fig. 10 SD01下層出土遺物実測図 (1/3)

底部はハラ切りか。25は赤生土器である。壺の底部の小片で底径5.8cmに復元される。26・27・29は須恵器である。26は坏身の小片。27は蓋の天井部である。29は坏身で1/3個体残存する。28は土師器坏である。小片で口径12.6cmに復元される。(Fig.14) 石製品である。36は掘り直し後の層出土の砥石である。砂岩質で砂粒は粗く被覆する。大形品で重量3250gを測る。41は叩石である。風化が顕著だが上下の面に打痕がみられる。重量356gを測る。

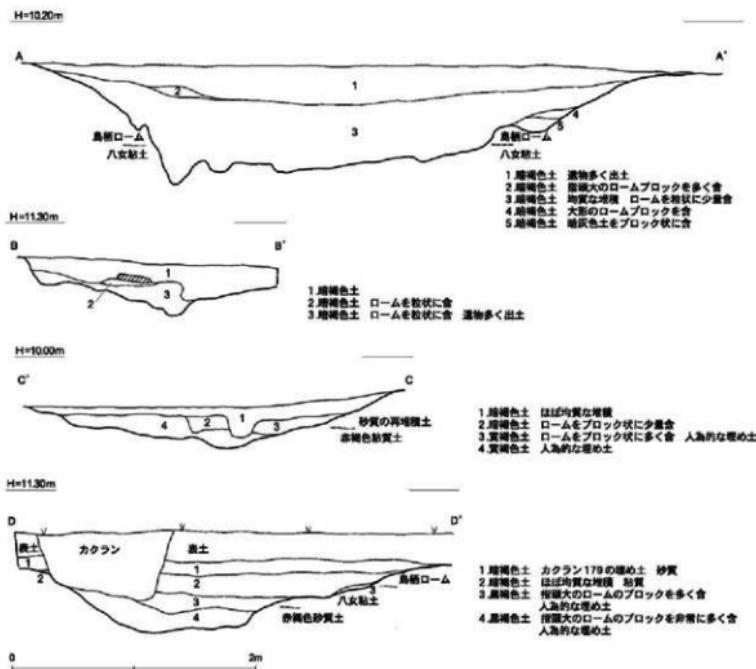


Fig.11 SD01 土層断面実測図 (1/40)

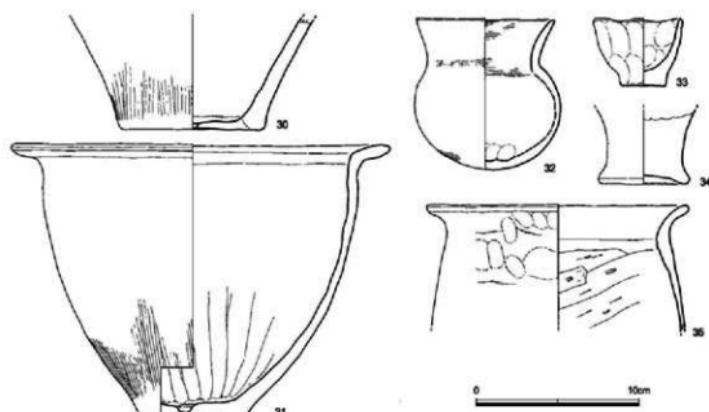


Fig.12 ピット出土遺物実測図 (1/3)

④ピット・その他

掘立柱建物を構成しないピット・柱穴について、出土遺物を図示している。SP500については遺物の出土状況をFig.13に図示する。SP185からは碗形の焼土塊が出土した。

(Fig.12) 30・31・34は弥生土器である。30・31は甕である。30は底部の小片で、底径8.2cmに復元される。31は60%残存する個体で、須恵Ⅰ式期の甕。内底面に焼成前に押圧による径1cmほどの凹みを有する。口径23.2cm・器高16.7cm・底径6.2cmを測る。出土状況はFig.13に図示している。34は底部の小片である。板付Ⅱ式でも新しい時期の甕か。底径4.8cmを測る。32・35は土師器である。32は小形丸底甕である。出土状況から柱の抜き痕に入れられていたと推測される。60%残存する個体で口径8.3cm、器高9.2cmを測る。35は甕の小片である。口径15.6cmに復元され外面に押さえの痕が見られる。33は手捏ねのミニチュア土器である。60%残存する個体で、口径5.1cm、器高4.1cmに復元される。

(Fig.14) 38はSP266出土。花崗岩質の小礫である。磨かれたような光沢を全体に持ち、欠損はない。被熱し赤化する。平面椭円形を呈し長径2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測る。39はSP301出土の叩石である。班晶が小さく緻密な花崗岩質の円礫を用い、表裏・側辺に打痕が観察される。特に図の左下には集中して打撃を加えた痕

がみられる。長径
11.5cm、幅9.4cm、
重量829gを測る。
42はSP243から出
土した使用剥片であ
る。黒曜石の経長の
剥片を用い、側辺に
微少な剥離が観察さ
れる。器長4.1cm、
最大幅1.6cmを測る。

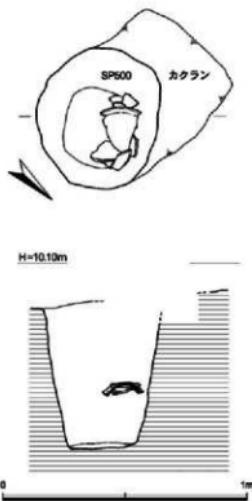


Fig.13 SP500遺物出土状況実測図 (1/20)

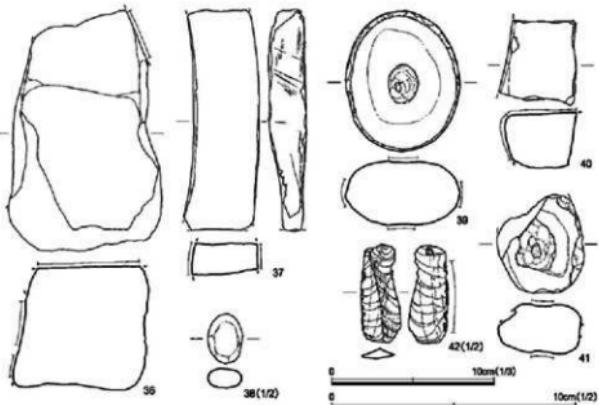


Fig.14 216次調査出土石製品実測図 (1/3・1/2)

第4章　まとめ

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物5棟・竪穴住居2軒・溝1条である。ここではまとめとして、以前より古代官道関連遺構の可能性が指摘されている溝の延長と推測される溝SD01に話題を絞って若干の所見を記したい。

第3章でも記したとおり溝SD01は調査区を東西に貫く溝である。土層断面からは少なくとも1回以上の掘り直しが行われ、人為的に埋められたのではなく、遺物から見れば遅くとも13世紀初頭頃までは凹みとして地表に残っていたものと推測される。底面に検出された小ピットはいわゆる馬つなぎの杭列の可能性を有するが、生痕との区別は難しく馬つなぎと断言することはできない。

問題はこのSD01を始め、周辺の調査（第3a・49・81・124・164次）で検出された溝状遺構が官道の側溝となるかどうかである。216次調査検出のSD01は第164次調査検出の溝状遺構SD01の延長線上に位置する。削平のため中央部が失われ、大きく3つに分かれた状態で検出された。これはSD01が元の地形に沿って底面が東西に山形に掘削されたことを示唆している。もしこれが官道側溝とすれば、道路は切り通しではなく地形に沿って蛇状に丘陵の尾根を横断する形であったろう。216次調査検出のSD01の幅は広いところで5mを測る。他地点の調査では広い地点で6~8.9mを測り、SD01は本来さらに広く深かったと推測される。しかし216次調査検出のSD01を古代官道の側溝とするならばこの数値は他の検出例に比して突出して大きい。しかし少なくとも216次調査検出のSD01は掘り直しがなされており、幅が広くなったのは掘り直しの結果といえなくもない。

第3a次調査地点は216次調査地の対面に位置する。第3a次調査検出の「大溝」との間隔は中心同士を結ぶと約25mで概ね一定している。太宰府周辺で検出されている古代官道の中で、この数値に匹敵するのは太宰府政府から南に派生する推定朱雀大路の路面幅35mという数値程度で、いわゆる「水城西門・東門ルート」と推定される道路状遺構の溝間の芯芯距離が11m前後である事を考えれば、その広さは突出しているといえよう。推定山陽道野磨駅跡における例では、駅家の前面を走る山陽道と推定される部分が他地点より幅が広く設定されている。216次調査検出のSD01と共に平行する溝状遺構の南には律令期の大形掘立柱建物群が検出されており、早良郡衙に關係する建物群と理解されている。先に挙げた野磨駅跡例をみると、溝間の芯芯距離25mという数値は、郡衙の前面部分の幅員を拡張した姿ともみえる。しかし南北の溝は平行するとはいえた同時期である確証はない。時期差がある可能性を考慮し、溝間の芯芯距離25mという数値を鵜呑みにすべきではない。となると現在の県道の下に第3・第4の溝が存在する可能性が出てくるが、ここは216次調査遺構表面からさらに切り下げられており、路面はもちろん側溝を含めた遺構はほぼすべて削平されていると推測される。

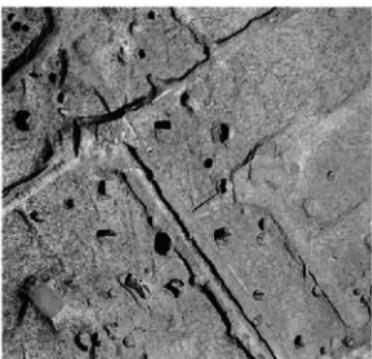
さて、結論だが、216次調査検出のSD01とその延長にある、またはこれに平行する溝状遺構は、2条をセットで考えることはできないが、古代官道の側溝の可能性は否定できないと推測される。216次調査検出のSD01は単独で存在するのではなく、その延長は谷を挟んだ別の尾根上でも方位を概ね一にして検出され、これに平行する溝もほぼ直線的に検出されているほか、直交方向に南の早良郡衙正殿の方向に伸びる溝が検出されているからである。東西に谷を挟むことから、この間は橋をかけるか、人為的に谷を埋めていたものと推測される。しかし第164次調査地点の付近で延長は谷に達られ、いきどまりとなる。この部分に推定される官道は松浦郡まで達すると推測されており、南北どちらかに伸びると思われる。

図 版

PLATES



1.調査区全景(直上より、上が南)



2.据立柱建物SB02(直上より、上が北)



3.据立柱建物SB07(南より)

PL.2



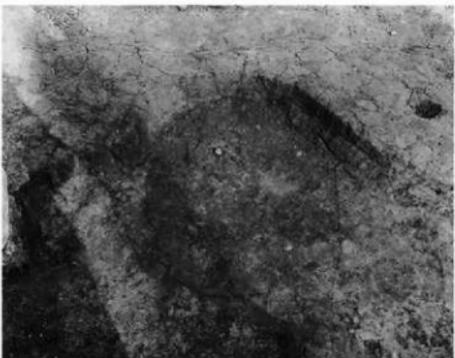
1.据立柱建物SB08(直上より、上が南)



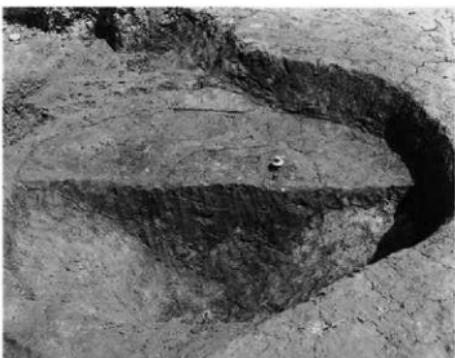
2.豊穴住居SC21(直上より、上が南)



3.豊穴住居SC167(東より)



1.SC167竪検出状況(西より)



2.SC167竪土層断面(南より)



3.SD01の東部(西より)

PL.4



1.SD01の西部(東より)



2.SD01東端土層断面(西より)



3.SD01東西方向土層断面(北より)



1.SD01土層断面(B—B'部分・西より)



2.SD01西端部土層(東より)



3.ゆるい落ちの土層(西より)

PL.6



1.SP500遺物出土状況(東より)



2.SP185焼土塊出土状況(北より)



3.SP123遺物出土状況(北より)

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ				
書名	有田・小田部				
副書名	有田遺跡群第216次調査報告				
卷次	43				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第919集				
編著者名	阿部泰之				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1				
発行年月日	2007年3月30日				
調査期間	2005年2月1日～2005年4月26日				
調査面積	1,405.3m ²				
調査原因	集合住宅建築				
ふりがな	ふりがな	コード			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯（世界測地系）	東経（世界測地系）
有田遺跡群	福岡県福岡市早良区小田部2-91-92-1-92-2地内	40137	0309	33° 33' 57"	130° 20' 07"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有田遺跡群	集落	弥生時代 古墳時代 古代	掘立柱建物5+堅穴住居2+溝1	弥生土器+土師器 須恵器+石器	溝は古代官道の側溝の可能性がある
要約	今回の調査では、掘立柱建物5棟・堅穴住居2軒・溝1条・ピットを検出した。溝SD01は第3次調査の大溝と併せ官道側溝となる可能性が指摘されていたが、今回の調査では官道側溝と認定するには至らなかった。				

有田・小田部 43

—有田遺跡群第216次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第919集

平成19年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 田中印刷
福岡市西区大字飯塚947番地の2